

大幅な給与削減を強行しているのに、 さらに賃下げするのか!!!

11月5日の団体交渉以来、11月7日、11月13日の拡大窓口交渉、
11月14日の事務折衝と交渉を重ねてきました。

原子力機構は、労組の反対を押し切って強行実施した、平均8%もの給与削減の撤回、見直しを拒否しつつ、さらに、40歳代以上について平均0.2%マイナスの給与改定を提示しています。給与削減特例措置は、ほかの法人では、必ずしも国家公務員べったりではなく、原子力機構が、何らかの緩和措置さえしないということに納得できるものではありません。

労組としては、大きなものでなければ、不満は残しても、労使間の合意を持つことは大切と考えていますが、現時点では、機構が大幅な何かを提示するなり、納得できる説明をしなければ、-0.23%と言えども到底合意できません。

しかし、合意できそうになくとも、機構提案の給与表には意見を言っていきます。

11月13日、機構は、右の改定を示しました。

労組は、

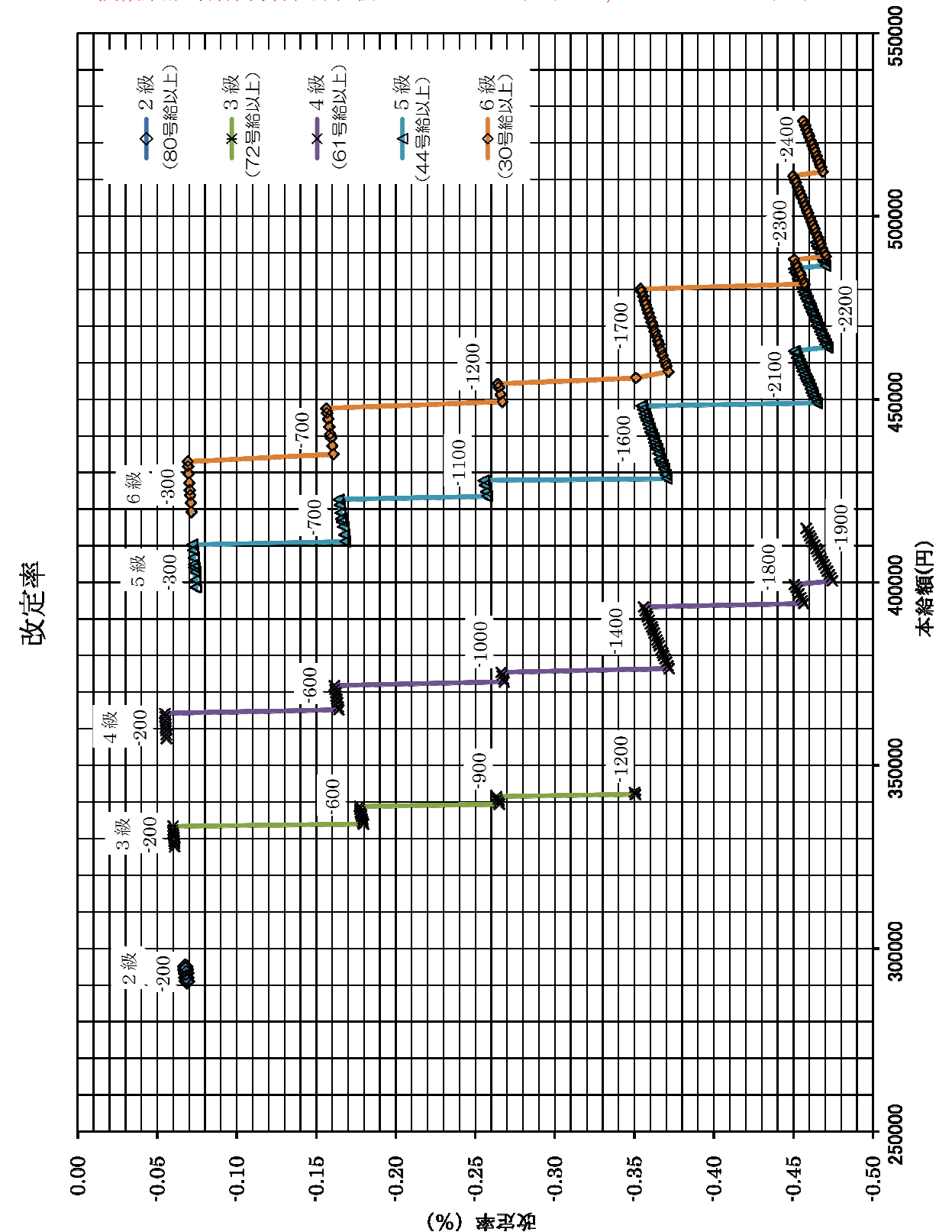
「7月に大幅な削減を強行しているのに、これからさらに削減するのか、到底合意できない」と主張しています。

その他、労組は

- ①同年齢でも下位級の切り下げ率大きい。改善せよ。
- ②切り下げのステップをもっと細かく設定し、丁寧に表を作れ。
- ③もともと国とは別の給与表に、国の方針べたりの改定を続けると、給与表がおかしくなる。自主性をしめせ。
- ④機構提案の話のなかで、4級の平均削減率が意外に大きいのは気になる。昇格が遅れている人が多くいるのか？などを述べました。

11月15日には拡大窓口交渉、

11月16日には、一時金問題も含めた団体交渉が予定されています。



討論会「原子力の将来と原子力機構の役割を考える」(10月31日)

報告その1

〈 忌憚のない意見を 〉

岩井委員長：4月の討論会で、大飯原発の再稼働の問題などの話が出て、いくらなんでもこのまま再稼働はないだろう。そこで何かを言わなければ原研労組ではないという話になり、「拙速な運転再開に反対する」声明を出しました。

そんなにすごいことを言ったわけではありません。政治家が、電気が欲しいからと言って「安全」といい、再稼働に踏み切るのはおかしいということです。5月に埼玉県で医療関係者の集会有り、そこで話をしました。東京新聞が取り上げ、結構大きな記事にしました。話題になりました。話題になるのは歓迎しますが、原子力村から我々しか発言しない、「真面目にやろうよ」という声は我々からしか出ないないことが残念です。

原子力規制庁が発足しましたが、人事を国会の承認を得ないままでスタートしています。いろんな議論があります。「田中さんは、一年間原子力委員長代理をやったからだめ」あるいは「原子力機構の出身者だからだめ」、などという声があります。それには違和感がありますが、そういう形ででています。世の中の世論は、「慎重に」というよりは、「原子力をすぐになくせ」という議論が増えています。声を上げている部分は反対が多いです。その中で、私たちとして、どのように考え、何を言っていくべきかを議論したい。原子力規制庁はどうかということでは、我々が関連するところでは、形の上では厳しくなっていると聞きます。審査など、事前の打ち合わせなしで、申請書をもってこいという風になっています。下打ち合わせなしで、審査などをすべて公開にということのようです。これまで、施設の変更では、重要なものは別にして、すべてを現在の基準でやれとは言われませんでした。これからは、変更申請でも、全体を今の基準のバックフィットを要求されることになりそうです。規制が物事をわかってくれてくれるなら、厳しい規制も結構ですが、心配な面があります。

お配りした資料、これまでの討論内容などがありますが、その続きでなければならないということではありません。忌憚のないご意見をお願いします。

〈 東海村議会の意見聴取会の感想 〉

書記長：初めに、先日あった東海村議会の意見聴取会の感想をお話します。一回目と二回目両方に参加しました。一回目に発言したので、二回目は控えたのですが、発言したかったです。なぜかという、運転させたいという人たちの理屈があまりにむちゃくちゃだったからです。たとえば、「原発が止まったら電気がなくなる」どころか、「エネルギーがなくなる」ようなことを言っています。確かに電気の30%は大きいです。しかし、政府のエネルギー白書を見ると、ここ10年くらい、電気は日本の総エネルギー利用の約3分の1、原発が電気の30%位とすると、全エネルギーの中で見れば、原発は約10%です。

過去の統計では、最大で約12%と書いてあります。10%は大きいです。ですが、10%がなくなったらすべてがなくなるわけではないのは明らか、その10%だって、設備容

量などから原発10%分がなければならぬというのではなく、そういう風に運転したからそうっただけです。「エネルギーは大事」という点は、僕も原発推進派と同じですが、それは「今の原発をそのまま認める」ということとは全然違います。基本的なことを知らないのか、知っていてとぼけているのわかりませんが、乱暴なことを言っていました。

別の論では、「今偉い先生方がどうするか考えているから、その結論を見て考えては」という意見、その論は、その「偉い先生方」が、「起りえない」といつてきたことがいくつも起きてしまった現実の中で、そのことをどう考えるかということが欠けています。

〈 これからをどう展望する? 〉

原研労組の過去の資料を見ればわかりますが、今の軽水炉では、安全性が不十分と考え、軽水炉の範疇ではあってもより、安全性が高い「固有安全炉」を研究しようという意見などが、労組主催のシンポジウムで述べられています。固有安全炉がよいのだといていた一人は、今の原子力委員長(近藤駿介氏)です。

今私が考えたいのは、軽水炉をさっさとあきらめて、その先の原子力を考えられるかということです。今後どうすべきか、またそれを考える中で、原子力機構や我々がどういう役割を果たすべきかを考えていきたいのです。本当は、そういうことは、機構の上層部が考え、今まで何が悪かったかとかも含め、上の方から下のものまで交えて、侃々諤々の議論が起こるべきところなのに、そうなっていません。全然そんな雰囲気はなくて、ひたすら福島対応。それで自分の責任をごまかそうとしているのではないかと思います。そういう風に見えます。福島対応はやるべきだし、一定の責任を取るべきだけど、それだけでいいのですかと思えます。みなさんのご意見を伺いたい。

〈 批判的意見や、危惧に対する態度は 〉

Aさん： 原子力機構の人間が意見聴取会で東海第2原発の再稼働に反対意見を述べたことを嘆くメールが、どこぞに来たという噂を聞きました。個人の意見表明を尊重する意識がないのでしょうか。

委員長：4月に声明を出しました。機構は何か言いたそうでしたが、何も言いませんでした。

Bさん：原電関係の人は、「会社の意見」とか前置きして、ずいぶんあほなことを言った人もいましたよ。運転再開論ならバカなことを言ってもいいのですかね。

Cさん：個人の意見として話した人もいたけれど、「原電」の意見と言っていた人がいましたね。

〈 起きたことに正面から向き合っているのか 〉

Aさん：今は防災という観点で、見方が厳しくなっています。茨城県知事さえも、「避難できる体制ができなければ……」と言っている状況です。日本原電から東海村内に配られたという資料、立派なパンフレットがあります。「津波でやられたけど、対策したから大丈夫です」と言い訳をする再稼働の論理です。「大丈夫」は福島第1だって言っていたでしょう。それ

なのに事故になった。

委員長：IEAE が求めているのは、「大事故が起きないように、しかし、それでも起きたら防
災対策が必要」ということ。日本でも、さる委員会で防災対策を強化しようとの議論が出て
いたが、葬られた。

書記長：国際的にそうなのかもしれないけれど、その論には違和感があります。確かに距離と
いうのは大きな要素なので、見落としした可能性に対する対策としての防災計画の価値は認め
ます。だけど、福島などの問題は、「人間だから見落としがある」というレベルの問題では
なくて、「当然考えるべきことをまともに対応していなかった」という問題だと思っていま
す。だから委員長のその意見に賛成できないのです。違うレベルの話なら別です。原発自体
をもっとずっと安全にして、さらにその上の安全を求めて、距離因子とか、防災計画を充実
させるというのなら、それは賛成です。

委員長：僕も、今まで、考えが足りなかったとは思いますが。東電でも考えた人はいたけれども、
取り入れなかった。

書記長：そこがとても大きな問題だと思う。

C さん：だから人災だといわれているのでしょう。わかっている、意図的にやらなかったのだ
から。金儲けのために。

G さん：だけど国の委員会などでは、そういうことは、「ほとんど起りえない」とし、だから
「過酷事故は事業者任せればよい」としてきました。

C さん：それは、電力業界が、そういう風に言わせたのでしょう。規制されればマストになる
から、電力業界の考えに取り込んでしまった。

書記長：取り込まれるのがおかしい。

C さん：取り込まれるような人しか集めない。そういうところだよ。

書記長：そこなんです。そこが問題なのに、そうなってしまったことへの反省がまったく見え
ないではないですか。

A さん：今までのやり方がよくなかったと気が付いていないのですよね。この件に関しては、
今までのやり方が間違っていたという反省、ここの人たちはあるのですが、やっている人た
ちは、全くなくて、「たまたま津波が来ちゃったんだぞ、自分たちは津波の被害を受けたん
だぞ」と学会誌などにもそう書いてあります。「自分たちが間違ってた」とかではなく、「た
またま津波が来たんだ」という認識です。

書記長：「自信を無くしちゃいけない」とかも言ってますよね。「無くせよ自信を！」と思いま
す。

A さん：人材育成でも、「後始末でも人材が必要なのに、こういうことになって学科の人气が落
ち、学生をどう集めようか」と言っていますが、バラ色の絵をかいて、人気を取ろうとして
いるのです。こういうことを起こさないために規制に特化して人を育成しましょうかとか、
そのためにどうしましょうかとか根本的に考えていかなければいけないと思うのですが、や
っている人たちは、そんなことを考えていない。規制庁ができたけれど、中身のほとんどが
保安院からの横すべりだし、この前の 100mSv の範囲の計算も間違えたし... 計算のミス

は規制委員会を貶めるためにわざとやったのかと疑ってしまいます。

＜ SPEEDI への考え方や、 いざという時の対応 ＞

書記長：どうせなら、SPEEDI でやればよかったのに...

A さん：それは、SPEEDI バッシングがあったのです。一時は SPEEDI は判断材料にしないと
かの方針があったのです。福島事故で SPEEDI を使わなかったことが批判されて、
「SPEEDI が悪い」ということになった。

書記長：それは逆恨みですか。

A さん：そうです。原子力機構の中には SPEEDI をやっている人がいます。そんなことにされ
てはたまったものではないです。機構としてどう考えるのかを言ってもらわないと現場の士
気は落ちてしまいます。

C さん：テレビの解説者が、「SPEEDI は山や谷を考慮する。だけれども、平坦な仮定の計算
では、山にさえぎられることなく、遠くまで拡散するので、広めに計算されるからそれでい
いのではないですか」とか言っていた。だけれど、「ちょっと待てよ、山谷があると、谷に沿
って遠くまで濃い放射能が流れていくことだってあるぞ」と思った。飯館村がそうだったし。

書記長：津波が奥まで上っていくようなものですね。

委員長：SPEEDI と両方計算して、広めにとるというのなら、安全サイドとしてわかりますけ
どね。

書記長：なんで SPEEDI を使わないのかと思ったのは、SPEEDI は緊急時用のものだから、計
算に必要なデータなど、サッと入れられるようになっていないのかと思ったから。

B さん：SPEEDI の結果を使用しなかったことが問題なのではないですか？

A さん：それがたまたまかから、SPEEDI は役に立たないと思わせたい人がいると思います。
自己弁護のための振る舞いに見えます。

B さん：規制庁が発表した計算、気象データは適当に入れたのですか？

委員長：年間の平均の風向の気象データで頻度が高いものを使ったようです。当然、現実の風
向きはどうなるかわからない。福島事故の時だって数日のうちに風向きはいろいろ変わって
いる。三日四日のうちに、山に流れて行ったり、海にながれたりしている。

B さん：それなら、風の強い日を想定すべきでは、平均的な条件では、あまり意味ないのでは。

書記長：正確にはかろうというのではなく、大体こんな風になるのでは、という汚染のイメー
ジを示すだけのものではないでしょうか。どこそで、これだけの線量と示すものではないでしょ
う。

委員長：一般の人があれを見ると、「ああよかった」とか、「うちはだめだ」とか思うかもしれ
ない。マスコミが、「100mSv に何とか市がひっかかった」とか報道するからそんな気にな
るかもしれないが、あれがすべてではない。

書記長：ラフな計算なのに、細かいこと言ってどうすんのかと思います。

＜ 防災問題について ＞

委員長：日本としてどうするのかということと、原子力機構がどこにどうかわるのかという

ことがある。SPEEDIの計算と比較して、安全サイドの結果を使うというのならわかりますが、SPEEDIを完全に無視した形になっているのは納得できない。事故の時だって、どうやって行ったか分からないけれど、あの日のうちに東京まで行って動かしているんです。

書記長：ただ、「必ずしも正確とは限らない」というのは、あの時はあったと思います。ちゃんと気象データが入るのかとか、万全だと確信できなかったとしてもおかしくはないでしょう。それはそれでいいけれど、すごいお金を使って準備してきたわけで、それを使わなかったというのは、ちくはぐ、準備がなかった。100億の金を使っているのに。

委員長：後で出ただけけれど、「あんなものを公開してはとんでもない混乱が起きると思って、出さなかった」と、ちらっと言っている。「あなたの方にいま流れていますよー」というような計算が出るわけですから。それに対する対応、「今バスを××台行かせ、避難できるようにします」と言える防災体制がセットでなしに、情報だけを流したら、確かにすごい混乱が起きる可能性がある。

Cさん：その情報伝達も万全ではないから、一部だけ流れて、とんでもないことになることを恐れたようです。起きると思っていなかったから、準備できていなかった。

書記長：そうなんですよ。どういう時にどういう決断をしなければならぬという心の準備も全くなかったということだと思います。

〈 SPEEDIの結果、どこで止めたかわからない 〉

Dさん：官僚のところでは止まっちゃっているというのが、「100時間」という分厚い本を読んでいたらありました。補佐官のところさえ行ってない。

委員長：どこでだれが止めたのか、わからないのです。ある新聞記者がそれを「徹底的に調べる」と言っていたが、その記事は出てこないのであいまいにされたままなのでしょうね。

書記長：西に行けと言われて、避難して、線量の高い飯館村に行ってしまった人たちもいますね。

Aさん：文科省が線量率を測りに来ていて、線量が高いことを見ているのに教えていないということがありました。どういう心理か理解できないところがあります。

Eさん：情報をしゃべるなど規制されていたようです。福島支援に行った者でも、あるチームでは、個人のメモも何もすべておいて帰れと言われたチームもあります。なのに後になって、「手当てを出すから、どこそこに何時から何時までいたというデータを出せ」と言われて腹を立てていた人がいました。

書記長：私が行ったときは、何も持ち帰るなどと言われませんでしたけど、いつどこにのデータを後から出せと言われたのには参りました。初めから言われていれば記録しますけど、たとえば、駅とか警察署とかわかりやすいところへ行ったケースはどこまでとはっきりわかりますが、西側、田村市から行って、原発の何キロ地点まで近づいたか結局わからない。景色のイメージはあっても、地図上のどこなのかかわからない。福島県のチームについて行って、今の線量率を読んでくれと言われ、「はいっ」と読み上げていただけでしたから。手当てなんてどうでもいいから、はっきりしているところだけ申請しました。

Eさん：歴史は繰り返すといいますが、日本に原爆が落とされた時にもプレスコードとか言って記事発表を規制した歴史があります。動燃のアスファルト固化施設の火災爆発事故では、内部規定ではバイオアッセイをやることになっているはずのケースをやりませんでした。作業者が嫌うからと、言っていました、わたしは情報隠しだと思っています。

Cさん：情報が隠されたとかの話が少しずつ表に出てきているように思います。真実でないものもあるでしょうけれど。

書記長：それが今後、どのように良い方向に転がるのかというが見えない。印象に残るのは、JCO臨界事故の後、原子力業界がすごく反省しましたのようなことを言って、NSネットだのピアレビューなどと言っていました、あれはどこへ行ってしまったのでしょうか。みんな忘れていましょう。違いますか？僕はどうせだめだろうけれど、もしちゃんとやってくれるのなら、違うかなと思っていましたので覚えています。

Aさん：自分たちでこういうことはよくないのだという認識がなければ、レビューしたって、「OK、OK」で終わってしまう。やらせメールとか秘密会議とか指摘されても、「何がいけないの？」という態度です。今まで事前の意見調整とかするもんだと思っているから、何がいけないのかわからないのです。近藤さんとか、なんであのまま居られるのですかね。

書記長：それは今の政府の方々の、原子力の安全問題に対する見方を表している、技術水準と倫理両方あるけれど。なんで首にならないのか？茨城県でもそうです。関村氏とか、県の委員でいるが、僕の家に来た電気が来てテレビを見れるようになったのは、だいぶたった後なので冷静に見れる頃だったのに、馬鹿なことを言っていた。

Aさん：国だけでなく、県のレベルでもこういう結果は出さないようにとか、事前に打ち合わせていたことがありました。役人さんはそういう発想なのですかね。真実と向き合うのが恐ろしいのかもしれない。

書記長：話は簡単ではないです。我々は厳しいことを平気で言っているけど、危険だといっても10のうち1起きるというようなレベルではないです。もっとまれなのだから、起きないことの方が圧倒的に多い。その中で、これではいけないのだと認識するかどうかが偉い人たちの認識に欠けていることだと思う。原子力はとんでもないものを扱っているのに、普通の装置のような感覚に見える。

東海村議会の意見聴取会の意見の中で、「ボイラーの圧力技術の向上だって、爆発事故があって、人が死にながら向上してきたのだ」と声がありました。それは僕だって人から聞いて知っていました。でもそれが限度を超えたら、使われない。たとえば水素ガスを使う大型のツェッペリン型飛行船、炎上して使われなくなった。ヘリウムガスの飛行船になって復活した。原子力を使うという点では、困難を乗り越えて使いたいという気持ちは分らないが、とんでもないリスクがあるなら無理なのです。「なんだったって頑張れば解決するのだ」というのは思い込み過ぎです。

***** 以下次号に 続く *****